美術館の鑑賞支援プログラムとの連携
—美術作品を通した学習の可能性—

竹内利夫・Gehrtz 三隅友子・橋本智
Toshio Takeuchi・Tomoko Gehrtz-Misumi・Satoshi Hashimoto
徳島県立近代美術館・徳島大学国際センター・徳島大学国際センター

要旨：2008 年徳島県立近代美術館と徳島大学国際センターは美術館を拠点とし、互いの案を出し合い連携した教育活動を企画そして実施した。地域において、芸術作品の保護と芸術に関わる教育活動を通して、生涯教育の実践を担う美術館の存在がある一方、大学は、地域に根ざし水準の高い研究と教育を推進する存在である。その中で、国際センターは留学生の日本語教育と留学生及び地域の人々の異文化理解教育の実践という二つの役割を果たさなければならない。この徳島という同じ地域に位置する両機関が、協力連携しそれぞれの教育目標を達成することを試みた。活動を進める上で、気づいた点を内省することを中心に、大学が地域の機関と今後協力して地域の国際化を含めた異文化理解教育の場となりうるかを考えるものである。

キーワード：美術鑑賞、日本語教育、生涯教育、異文化理解教育、国際交流

はじめに

徳島大学国際センターは、地域の様々な機関と協力連携し、日本語教育及び地域の国際化を目標とした異文化理解教育の活動を行っている。今年度は、美術館からの呼びかけをいただき、互いの目的をすり合わせながらの話し合いを持った結果、美術館という場で美術作品を学習素材とし、外国人日本語学習者と日本人学生そして地域の日本人が日本語を使って交流する活動が実現できた。本稿は、初めてのこの試みを美術館そして大学といったそれぞれの立場から振り返り、互いの目的目標が達成できたのか、連携することによる効果は何だったのか、そして今後どのような連携が図れるかを考察するものである。

1. 美術館の鑑賞支援プログラム

本実践は日本語学習の題材として美術鑑賞を取り入れた。その内容は、徳島県立近代美術館の通常の鑑賞支援プログラムをそのまま援用し、または独自のワークシートを作成し使用した。通常の単なる施設案内や日本文化の紹介といった役割に縛られず、美術鑑賞を中心とする活動が実施できた。学芸員としては挑戦的なことであり、自分自身も学習者としていくつもの学びを体験するものであった。

1. 1.　プログラムについて

まず美術鑑賞に対する考え方について理解を求めておきたい。絵の鑑賞というと、解説文やビデオを通して知識を求める学習をイメージする人は少なくないだろう。そうした活動であれば、留学生と支援者らはもっぱら知識の受け渡しに従事することになる。けれども本実践においては、美術に関する知識の受け渡しはほとんど問題にされない。代わりに、各人にその絵がどう見えているかを確かめ合う活動が主となる。これはここで取り組んでいるプログラムが作品学習を主眼とするものではなく、絵を見る方法や態度の体験的な学習を重視するためである。

徳島県立近代美術館では来館者と作品の橋渡しをするための様々な層に向けた催しを行っており、特に学校教育との連携活動にも力を入れている。学校から来館した子どもたち、あるいは休日に訪れた子どもたちのために用意されているのが、今回使用した「こどもワークシート」である。特別展や所蔵作品展の会期ごとに作成しており、ひとりで展覧会を見て歩く手がかりとなるような、平易なクイズやうながしが掲載されている。美術館現場ではセルフガイドと呼ばれることも多いツールである（註 1）。今回のシートは、例えば図示された絵を探して、描かれた季節を言い当てたり、その根拠として登場人物の持ち物に目を向けたり、といった内容である。広い展示室の中から歩いて絵を探し、その絵の中にクイズに答えるための根拠を探す活動の中から、絵を観察して、その観察をもとに描かれた世界の読み取りが進むようううながされる。このような平易な練習問題をきっかけとして、鑑賞になじみのない来館者でもひとりで絵を見て歩くことに親近感と達成感を体験することが当館のこどもワークシートのねらいである。

また「鑑賞遊び」と名付けているプログラムにも取り組んだ。これは学校で使いやすい教材として当館が研究開発を続けている「鑑賞シート」のシリーズに含まれるもので、伝統的な遊びのルールにヒントを得て柔軟な学習行動と支援をねらう考え方である。今回行ったのは、美術作品をカルタの絵札に見立てて読み札を作り、当てっこをする「シーがる・た」のプログラムである（註2）。

美術鑑賞の学習には様々な目標と方法を設定することが可能であり、必ずしも一様ではない。しかし、ここで取り組んだワークシートと鑑賞遊びのいずれにも共通するのは、自分の力で絵や美術館を楽しむ体験をうながすという考え方である。つまり美術を知ることが目的ではなく、自分の見方・感じ方を確かめることに重きをおく。この点が本実践の連携の鍵であると見ているので、理解を求めたいと考える。

1.2.　連携の考え方

本実践のワークシートやカルタなどの支援は、自分の力で絵や美術館を楽しむ体験をうながすという目的から、作品学習型ではなく体験方法のオリエンテーション型のプログラムとなっている。またその体験方法は、専門的な批評技法を習うよりも、自分なりに鑑賞を進める体験に重きをおいていることが特徴である。具体的には、自分の人生経験や資質に基づいて、その絵に対する感じ方や考え方を確認したり、それを仲間と交流したりする活動が行われる。ここに日本語教育との連携の可能性を見ている。

その観点について述べる。まず、これらのプログラムの要点は、自分の考えていること（考えつつあること）を話す／表すことにつきる。

そして、美術作品の特性として、語りつくせないあいまいさがある。何かを説明した挿絵や新聞記事などと違って、絵画は画家の世界観が一つにまとめあげられた手作りの視界である。その個性的でなぞめいた性格が、一般に美術は難しいと思われがちな原因になっていると言えるのだが、実はそこにメリットがある。

つまり、どう見えても「良い」とは言わないにしても、どう見えても仕方がないということである。資質や能力の異なる者同士が、対等にリラックスして、自分の考えていることを話し合えるような懐の深さを本来美術は持っている。ここに、発話の意欲と、互いに耳を傾け合う態度をうながす可能性がある。よくある名画解説のように、絵の正解を教え込むタイプの活動であれば、あいまいさは不満の種となることも多いのだが、鑑賞者の側の体験や気づきに目を向けた活動にあっては、それは利点ともなる。そのことを私はこれまでカルタなど鑑賞遊びの実践を通して実感してきた。

一般論として美術は非言語コミュニケーションである。そこから多文化理解の素材ないし媒体として美術をとらえる先行研究もある。けれども本実践の着眼点は、むしろ美術の伝わりにくさ、説明しづらさに寄り添うものであると考えている。それは作品と出会う人たちの側の、個々の事情、背景に寄り添う性格も持っている。このことが、第二の言語とアイデンティティを獲得しようとする人たち当人とその支援側の双方に、これが体験する意味のある活動だと考える理由である。

1.3.　カルタの実例から

実際にどのような鑑賞の内容となるのか、留学生が書いた「シーがる・た」の実例を挙げてみよう。

A　疲れたわ　少し休憩しようか
B　自然を愛するひとがとりとはなとはなしている

Aはバイオリンから手を放した女性の様子を描写している。画面やタイトルには、演奏をやめようとしているのか始めようとしているのか、決定的な証拠はなく、「疲れた」というのは鑑賞者の想像である。では想像だから奇想天外なのかといえばそうともいえない。とりたてドラマティックな情景描写ではないにしても、きりりとした顔つきや物腰から、少なくとも笑いこけたり眠ったりしているのではない、何かふと考えにふけっている

図1　A
河井清一
休み日の朝
1955年
徳島県立近代美術館蔵

ような雰囲気が読み取れるだろう。絵に描かれているのはそこまでである。その先を疲れたと読むか、まだまだやる気に満ちていると読むかは、どちらとも解釈できる幅の範囲内なのである。

Bは花鳥とあわせて大きく描かれた人の顔から、愛するという態度を読み取っている。これもどこにも証拠のある話ではなく想像である。しかも作品は「彫刻と花鳥」と題されており、画家の意図として人の顔は彫像であると推測できる。実際、髪の様子から見ても、美術教室によく置かれている石膏デッサン用の類であろう。とはいえ、彫像も花鳥も写実的に精密描写されているわけではない。青空を背景に花鳥と向き合い、ほほえむような目つきと口もと、そのような絵柄だけから判断すれば、彫像を擬人化した演出にも見える。リラックスして寄り添っているようなストーリーを読み取ることが一概に法外であるとも言えないのである。

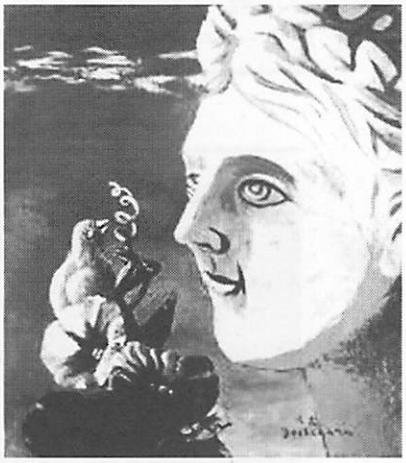


図2　B
吉原治良
彫刻と花鳥
1931 年
徳島県立近代美術館蔵

ここで絵の解釈の妥当性を論じるわけではない。絵を見る行為は、正解を決めたり、隠された謎を解いたりといったこととは限らないということに注目したいのである。「疲れた」も「愛する」も画中に根拠を見つけることのできるフィクションである。だからこそ他者と当てっこをすることができる。正解してもらえた時には考えを認めてもらえてうれしいし、正解することができなかった場合も、互いの考えを交流することはやはり楽しい。自分に見えたものを認め合いながらの活動だからである。

これらは美術鑑賞の活動としてそう難しいことではない。事前の予習や、とりたてて美術の知識などを活用するわけでもない。では低級な活動なのだろうか。自分が言葉を知らぬ国へ留学し、大学での知り合いと一緒に美術館へ行き、名を聞いたこともない画家の絵を前にした場面を想像してみよう。「疲れた」や「愛する」という言葉が出るだろうか。あえて外国語会話の話題やスピーチにするほどでもない、自分がものを見ながら考えている途中のことを率直にこぼし合う、そうした交流がカルタでは生まれる。母国の近しい友人や家族との間でようやく当たり前となる言葉であるとはいえないだろうか。それらの言葉を使ってみたいと思い、誤りを恐れることなく使いこなし、留学先の人々と交流することができる、そういう場面がここにあったと考えている。

2. 実践報告

2008年4月に県立近代美術館の学芸員の竹内と徳島大学国際センター教員の三隅、橋本がミーティングを行い、プログラムの方向性及び実施について話し合い以下の実践を行った。

2.1 すごろくを使った活動

5月30日に国際センターの日本語研修生4名が美術館の「大正ロマン昭和モダン」展に行き、小学生向けに作られた「すごろく」を使って鑑賞した。日本語プログラムの一つとして行われたため、まず日本語研修の授業の中で交通アクセスの方法や場所の確認をした。実際の鑑賞は2時間半程度を用いて、研修学生（中国からの留学生、日本語レベルは初級）と地域サポーター3名および竹内学芸員がペアとなって行った。事後のアンケートでは学生、サポーターから非常に好意的な反応が得られた。学生からは、クラスでの授業から離れて自由に学んだ日本語を活用できたという答えもあり、美術館でのプログラムを活動として実施することが確認された。

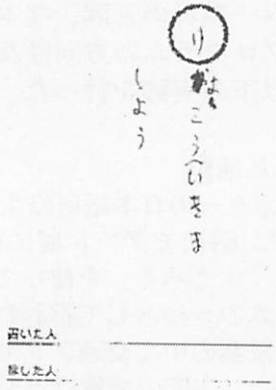
2.2 カルタを使った活動

カルタを用いた活動は所蔵作品展でも行われた。2回目の活動は徳島大学で日本語教師を目指す学生のための授業（「日本語教育方法論 I」）を履修している日本人学生を交えて行われた。はじめに日本人学生を対象にしたオリエンテーション・セッションを行った。日本人学生とはいえ、

ほとんどの学生が美術館に行ったことがない、あるいは行ったとしても美術の鑑賞の仕方がよくわからないという状況であった。それで日本人学生自身に美術、そして美術館に興味を持ってもらい、絵画を通してどのように外国人とコミュニケーションを取れるのかを考えてもらった。ここでは実際にカルタを作り、彼らがまず活動を体験してみた。

7月19日には上記の日本人学生、日本語研修コース履修学生4名と徳島大学に在籍している留学生とその家族14名（子ども2名を含む）で「カルター絵を見て伝え合おう」という活動を行った。

2008年7月19日　「カルタ」活動



カルタの例

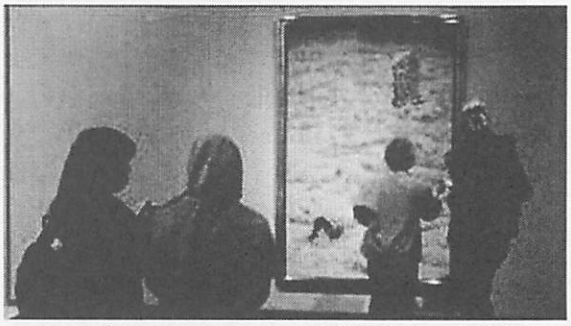
日本語を母語としない人が書き、それをみながらペアで絵を探す

活動後のアンケートを見ると、日本人、外国人ともに非常に好意的な反応が見られる。日本人学生からは、ペアワークがうまくいった理由について、「絵を通して会話が広がるから。いろいろな見方や表現の仕方があって話もそこから弾んでいけたから」「自分だけでは思わないイメージをペアだと共有することができたのがとてもよかった」と答えている。一方、外国人のコメントには、「絵を見ながら楽しく話した。絵が良いし、ひとつの絵にたくさんの意味がある」「日本人と一緒に絵を見て、たくさん話して、いろいろなことを勉強した。日本のことをよく理解できた」というように、絵を媒介にして日本人と楽しく話ができたと述べている（アンケート結果は最後に添付されている）。このことから、言語のレベルに差があっても、十分コミュニケーションが図れており、楽しく日本語で話せていたことがわかる。とりわけ、絵画という媒介があり、また美術館という教室とはかなり異なる環境では、日本人、外国人ともに言語のバリアを超えて日本語による「会話」を楽しむことができたといえる。

2.3　カルタを作成した活動

2008年11月18日に第3回目の活動を行った。今回は、徳島大学の「日本語教育演習」を履修している2名の日本人学生と指導している教員が事前にワークシートを作る形で行った。これは、対象となる日本語学習者のレベルがまだ初級であり、県立近代美術館で用意されていたプリントでは難しすぎるということでカスタマイズしたワークシートを作成することにした。

ワークシートの例



2008年11月18日　特別展での活動

今回の活動に参加したのは、日本語研修コースの学生10名、日本語教育演習を履修している日本人学生2名、地域サポーター7名、および竹内学芸員であった。アンケートの結果からは、ワークシートの質問に答えながら絵を見て会話をしたのでやりやすかったという意見があった。一方、質問がワークシートに書かれているため、それにとらわれてしまい、質問の内容の理解とそれに対する答え方に重点が移ってしまい、文法の説明をするペアも見受けられた。この活動の本来の目的は絵画を媒介として日本語で話す、というものであったのに、今回は絵よりも質問と答えに気をとられ、活動を計画した側の意図が伝わらなかった。絵を通してコミュニケーションを促すために、どのような手立てが効果的なのかを考えるよい機会となった。

3. 連携を通して（学芸員の立場から）

筆者の一人である竹内は学芸員としてこれまで「シーがる・た」を小学校低学年から中・高生、大学生、保護者など様々な層に実践してきた。そこでは年齢や、美術鑑賞の経験や資質が異なる者同士でも、お互いの見方に発見や驚きを抱いて、共感的に交流できるこのプログラムの効果を実感してきた。そのことは今回の実践においてもやはり納得させられた。年齢や能力を越えて交流することができたのと同様に、言葉の力に差のある者同士においても期待した交流活動が生まれたのである。

このたびの新たな活動を通して、美術鑑賞の支援の場でのコミュニケーションの問題について改めて考えさせられた。私は学芸員として来館者に向けて作品解説を話したり、掲示パネル用に説明文を書いたりする立場にあるが、そこでのコミュニケーションの質の問題に悩まざるを得ない。そこでは知識を必要とするタイプの利用者に向けて最大公約数的な情報提供を行うことが基本となるのだが、言うまでもなく来館者のニーズや資質は多様であり、せめて初心者と熟練者双方への配慮を盛り込むことや、全ての人に展示意図を理解してもらうための最低限の情報を適切に示すことで精一杯である。そうした観点から少しでもコミュニケーションの質を問い直すことが、私が美術鑑賞の研究に取り組む動機ともなっている。

美術鑑賞が難しいという一般の声を聞くことは多い。奇抜な近代や現代の美術作品を前に途方に暮れる来館者の発言や態度からは疎外感が伝わってくる。多様な価値観を様々な方法で表す美術の世界は、いわばそれ自体が多文化の世界ともいえる。一元的な情報の受け渡しに陥りがちな美術館のコミュニケーションを解きほぐす可能性を、この連携活動に見出せるような気がしている。

3.1 気づき

自身が学習者のパートナーとして本実践に参加したことで経験したことを記しておきたい。

この活動のきっかけは元々別のところにあった。2008年度の特別展「アメリカ版画の今」の開催に向けて、これまでにない催しの企画を三隅教授に持ちかけた。多元文化の国といってよいアメリカの美術を紹介するにあたって、日本人ではない人の視点を取り入れて作品を観覧するという催しを考えた。学芸員の視点から多文化を語るのではたかが知れている。実際に日本人とは異なる文化背景を持つ人の見方を、硬直した美術館の語りに加えたいと考えたのである。結果は、あっさりと不発に終わった。私は留学生など海外の人を紹介してもらおうともくろんでいたのだが、留学生にせよ就労者にせよ事情も資質も様々である。日本人に向けて多文化を啓蒙する外国人といったイメージは、それ自体が依然私の生み出した外国人のステレオタイプでしかなかったのである。もし運よく期待したような人材に出会えたとしても、同じ誤解に自ら直面することになったと思われる。

その代わりに、日頃の鑑賞支援プログラムを活かしてみることになった。これまでの互いの活動を知り合ってみると連携の可能性が随所に感じられた。わからないと思える異文化への関わり方を学ぶ点において、両者に共通する要素は多々あるのではないだろうか。

第一回目の活動日に、ワークシートを使ったペア活動に自身もサポーター役として参加した。これも三隅教授の提案である。活動を初めてすぐ自分の奇妙な行動に気がついた。うまく伝え合えない事柄や単語を、下手な英語に翻訳しようとやっきになっているのである。相手のわかる日本語で説明し切れないことを、英語なら伝えることができるだろうか。私が英訳しようとしていたことは、分かり合うべきことではなく、私から伝えておきたいこと、知っておいてもらいたいことだった。その上で私は自分の考えを述べようとしていたように思う。これは対話ではない。これまで鑑賞者との対等なコミュニケーションを心がけてきたつもりの自分が、圧倒的な知識を背景とした力関係の中で語る存在でしかないことを痛感した体験であった。そして、自分の日本語の力とてたいしたものではないこともよく実感された。教えたり与えたりするのではなく、一緒に確かめたい気運の高まった事柄について、それがどんな小さなことでも（あなたの国にスダレはあるか？）、力を合わせて共通理解が進んだ体験は初めてのものだった。支援という立場への大きな気づきを、留学生とのペア活動は私に体験させてくれたのである。

もう一つのエピソードは、非常に苦しい思い出である。また別の展覧会で、ある留学生とペア活動をすることになった。ワークシートによる観覧が主な活動目標だったが、和気あいあいと絵について話し合う雰囲気が生まれることはなかった。サポーター役の私の力不足がもち

ろん大きな原因なのだが、相方の様子を見て気付いたことがある。ワークシートの設問や作品鑑賞など、活動の対象自体に関心がなかなか高まらないのである。といって、学習意欲の低い人ではない。そうではなく、設問の日本語を完璧に理解すること、さらに画中の事物をまず全て日本語の単語に翻訳すること、そこにこだわって進めないのである。何事かを自在に考えたり述べたりするために、全ての単語と文法を用意してからでなければ人と話すどころではない、そんな気持ちが痛いほどわかるように思えた。自分が海外へ旅した時はそう感じるからだ。ところが興味深いのは、ワークシートの活動を苦しみながら終えて、別の展示室を一緒に散策していた時に、その人は作品に関するコメントをぽつりぽつりと話してくれたのである。男が宙に浮いて撃ちのめされたかに見える様子を描いた作品（ロバート・ロンゴ「無題」）を見て、「この人は撃たれたのか」と質問してきたり、軍服を来た人々を描いた作品（山下菊二「わたしと鳥と音楽と」）を見て、「これは兵士だ、何をしているのだろう」と話しかけてきたりした。その留学生は戦乱が身近な地域から来た人だった。

カルタのような表現的な鑑賞活動においては、本人が意識することなく生活体験や内面が反映することが多い。そうした背景があるから絵を語ることができるとも言える。私のペアの留学生は日本語学習の本当に初歩のところで苦しんでいる様子だったが、そのような人にも分析的な設問で構成された教材よりは、絵に鏡を見るカルタのような表現活動はむしろ有用ではないかと感じているが、このことは反省とともに今後の課題として忘れないようにしたい。

4．連携を通して（大学の立場から）

4.1 日本語教育の視点

参加した日本語学習者は、2008年度の研修コース春・秋期研修生 14 名（初級）と広く全学から募集した 14 名の計 28 名である。教室での日本語学習とは違い、学習した表現や語彙を駆使して、本当に言いたいこと聞きたいことを伝え合っている様子が確認できた。

「美術館で日本人と作品について話す」という活動に至る前に、学習者は徳島駅に集合し、文化の森行きのバスに乗り、乗り換えて美術館へ行かなければならない。そこで、初めて出会う地域の人とペアになって、二人で美術館を歩いて「作品を探す」「作品についてのクイズに答える」「作品が何を表現しようとしているのかを考える」ことを行った。

教室内で行う地域サポーターとの会話練習とは、全く違った緊張感が学習者にあったと思われる。それは、教室内では困ったときに助け舟を出してくれる教師が常にいること、そして教科書の表現を練習することが前提になっているからである。そうではない、美術館という空間の中で美術作品を前に日本人と協力して達成しなければならない課題（タスク）が与えられるという感覚である。

しかし、美術作品を前に感想を言うことが強いられているのではなく、すごろくやカルタを使って自分の知っている日本語を日本人に伝えてみる、そして伝わるかどうかを確認するという作業の繰り返しであることに気づいたときから、実にのびのびとこのタスクに取り組んでいる様子も観察できた。

さらに、日本人とのやり取りの中で、難しい表現を使うことも、簡単な語彙で何とか「子どもすごろく」の内容を確認するといったように、学習者のレベルに合わせた活動が行われた。それは、活動後のアンケートにあった満足度から確認できた。

4.2 異文化理解教育の視点

参加した地域サポーターの感想もおおむね満足を得られている。しかし、数二人の方から伺ったことは、例えば第一回の活動は竹久夢二を中心とした作品展であったが、サポーターは竹久夢二について、外国人学習者に説明する、あるいは知識をあたえなければならないと思っていた人がいたことである。こちらの意図としては、一つの美術作品を日本人として見て、何を感じるかどう思うかを学習者に伝えてほしいこと、そして学習者からは彼らの感想や思いを彼らが話せるレベルで最後まで聞き取ってほしいということであった。活動後たくさん調べて、勉強した話を聞いて、こちらの意図を伝えたとき、「ああそうだったんですか、ほっとしました」の声が聞かれた。

作品についての知識を獲得してほしいのならば、その人が理解できる言語での資料を渡しして、作品を鑑賞するだけでその目的が果たせるであろう。しかし、こちらの目的はそうではないのである。美術作品という作家のメッセージを一人の日本人としてどう受け止めるのか、さらに外国人としてどう受け止めるのか、それらを交換すること、その結果互いに何が生まれるのかを確認してほしいということなのであ

る。

一つの作品を通して、同じ感覚を抱くという共感の場合はことに喜びを分かち合えるだろうし、異なる感覚の場合は、どうしてそう感じるのかという相手の価値観を認めるという作業が始まると信じる。

特に前節3.1気づきに書かれた内容は、異文化理解における「気づき」以外の何ものでもないだろう。

5. 今後の展望　むすびにかえて

以上のように、今年度の活動は初めてのことであったが、互いの目指したものに歩み寄れ、成果があったように思える。

初回の打ち合わせの際、美術館の竹内学芸員から美術館の様々な取り組みを紹介された。その時、さらに子供を対象にしたワークシートを見せてもらったのだが、前述の美術に対する例えば作品や作家の知識ではなく、この作品に対峙する「私」が何を感じるか、すなわち体験を重んじていることに驚いた。これまでもっていた美術に対する価値観や美術教育に対する偏った見方があったことに気がついたのである。

「すごろくシート」の設問を一つ一つ見て、その子供対象ゆえ平易なことばで、そして美術館全体を楽しめるようなクイズやタスクが並べられていた。日本人と留学生がペアになって協力し、課題を解いていくことに関心を持った。

第一回の活動を実施する前に、5月の連休に筆者の一人である三隅は、パートナーとペアになって、約90分をかけてこのすごろくシートに取り組んだ。ドイツ人のパートーナーは日本の文化や美術に対しての関心は深く、関西を中心に多くの美術館訪問を趣味としている。すごろくを使った活動に関しては、あまり興味を示していなかった。しかし、全ての課題（クイズもあれば絵と同じポーズをしてみようというものも）を二人で終えたあとの感想は、いつもは見過ごしてしまうような、また気にもとめない方法で絵を見るという別の視点が与えられ、いいようもない満足があったことである。この感覚を学習者と日本人に是非味わってほしいこと、そこから何が生まれるのかを見極めたいというのが、今回の連携のもう一つのきっかけになったといえる。

今回の活動に関わった留学生、地域パートナーそして著者の3人をはじめとする美術館、大学の関係者は、関わりあうことで様々な気づきを得た。

互いの役割を確認し、さらにアイデアを出し合って今後も連携した教育活動を実践していきたい。

（註1）「こどもワークシート」は、学校教育との連携を担当している当館の森芳功専門学芸員を中心に、各展覧会の担当者も参加して作成しているもの。このシートや学校鑑賞の支援において、自分の力で鑑賞する体験のうながしを重視する方針も、森が主導し実践を広めてきたものである。

（註2）「鑑賞シート」は教員、大学の研究者、学芸員がチームで取り組んでいる研究会「鑑賞教育推進プロジェクト」において開発しているもので、私もこのメンバーである。「鑑賞遊び」のプログラム「シーがる・た」は濱口由美教諭が開発した授業案で、もともとはアメリカの彫刻家シーガルの作品をもとにカルタの絵札と読み札を作る活動として考案された。その後、濱口教諭と筆者が美術館の展示作品を絵札にする活動を繰り返し実践してきた。その汎用性の高さから、様々な層での実践を展開している。

参考資料
アンケート結果
２００８年７月１９日
「カルター絵を通して伝え合おう」

日本人学生

１．　ペアの活動はうまく行きましたか。

①　大変うまく行った　　１０

ちゃんとコミュニケーションが取れていたと思う。すぐに絵を見つけることができたから。絵を通して会話が広がるから。いろいろな見方や表現の仕方があって話もそこから弾んでいけたから。自分だけでは思わないイメージをペアだと共有することができたのがとてもよかった。絵を通してお互いの意見をたくさんしゃべれたから。いつも美術は難しいものだと思っていたのに、今日の活動でそうではないと思った。一緒に話し合いながら絵を見るのが楽しかった。何とか伝わったと思う。意見交換がスムーズにできたから。　いっぱい話せたから。楽しみながらできたので、和やかに進んだから。

②　普通　　０

③　うまく行かなかった　０

２．　今日の活動は全体的にどうでしたか。

①　大変楽しかった　　１０

また新しい外国の人と知り合えて、いっぱい話せたのでよかった。留学生とたくさん話をすることができたから。絵に対して新たな発見を留学生がして

いたり、とらえ方が自分と違っていたので楽しかった。いろいろな国出身の人と話し合えるのは、本当によい活動になる。留学生の方と交流できたから。相手の人も楽しそうにしてくれていたから。留学生と話しながら絵を見るのがすごくよかった。絵に対する見方が人それぞれで面白かった。日本語を伝える難しさを実感した。面白かったから。みんな喜んでいたから。絵を通じてたくさん話すことができたから。絵を介することで、目的が一緒なので、お互い協力できたので。

② 普通　　0

③ 全然楽しくなかった　0

3．　これからの活動のためにアドバイス、意見等、自由にお書きください。

もっと頻繁に今日のようなことを行ってくれたら、内容の詰まった活動ができると思う。

今日みたいに何か共通するものを通して会話したり、活動できる機会があればいいと思う。

同じような機会がまたあればいいと思う。

カルタだけでなく、美術館のパンフレットを共同で作るなど、いろいろなバリエーションがあってほしい。

絵だけでなく、博物館でも同じことができるなと思った。

こんな活動がずっと続けられたらいいなと思った。

こういう活動をどんどんしてほしいとも思った。

同じ作品について３枚書いたら、何か違う心境になるかもしれない。

留学生が書いたカルタをまわしてみてもいいと思った。

いろんな人が参加できるといいと思った。

留学生

1．　ペアの活動はうまく行きましたか。

① 大変うまく行った　　１０

日本人学生の説明がよくわかった。

絵を見ながら楽しく話した。絵が良いし、ひとつの絵にたくさんの意味がある。

日本人と一緒に絵を見て、たくさん話して、いろいろなことを勉強した。日本のことをよく理解できた。

うまい絵がたくさんある。ペアのゲームが面白かった。

いいパートナーを見つけた。いろいろお世話になった。

文化の大変が面白かった。

日本人がやさしく説明してくれたので、すぐわかった。よかった。

みんなと一緒にたくさんおしゃべりができたし、展示の絵も面白かった。

たくさん日本語を話した。そしてたくさん面白い絵を見た。

② 普通　　0

③ うまく行かなかった　0

2．　今日の活動は全体的にどうでしたか。

① 大変楽しかった　　１０

絵も見たし、日本語でも話したし、楽しかった。

楽しかった。

みんなと一緒に絵を見て、とても楽しかった。

いろいろな絵を見た。うれしい！

有意義な活動だった。時間の配分もよかった。

人によって絵を見ることが違う。いろいろな意見を話すことが面白かった。

クイズが面白いので、楽しかった。

時間が十分あった。

② 普通　　0

③ 全然楽しくなかった　0

3．　これからの活動のためにアドバイス、意見等、自由にお書きください。

時間が長いほうがいい。

もっと自由に絵を見るなら、もっと良いと思う。

日本の伝統活動にもっと参加したい。日本の風習をもっと知りたい。

カルタのゲームをしたので、みんなよく絵を見てよかったと思う。

絵があまり多くなくて残念でした。

この活動で日本語の練習ができました。よかったです。